

文学雑誌『東西』解題・総目次・索引

和田 崇

『東西』解題

一

文学雑誌『東西』が創刊されたのは、終戦後まだ一年も経たない一九四六（昭和二一）年四月のことであった。終戦直後の日本人には、敗戦による飢餓と虚脱感が生じた一方で、解放による自由な気風も起こりつつあった。その中で人々は新しい文化を求め、そして、その象徴である出版物に群がった。

戦争によって日本の文化は廃類した。国家総動員法に依拠した言論・出版統制が行われ、国策に沿わない自由な出版物は姿を消した。また、出征軍人たちは、出版物そのものにすら容易にありつくことができず、『きけ わだつみのこえ』（東大協同組合出版部、一九四九年一〇月）に収められた学徒兵の手記には、ほろほろの古新聞や薬の効能書を熟読するほど、文字に飢えていたことが記されている。

こうした戦時中に満たされなかった読書欲の反動によって、終戦後の日本には、未曾有の雑誌ブームが到来した。一九四五年一月、青山虎之助の設立した新生社が、いち早く文芸色の強い総合雑誌『新生』を創刊すると、初版十六万部が即日完売、増刷した再版二十万部も一兩日で売り切れた。^①『新生』の後を追うように、翌年の一九四六年一月に岩波書店の『世界』、筑摩書房の『展望』、鎌倉文庫の『人間』が創刊され、戦

時中に当局の弾圧によって廃刊した『中央公論』と『改造』も復刊された。さらに、出版事業令の廃止もあり、八雲書店や真善美社など、終戦後の文芸史を賑わせる新興の出版社も、この時期に誕生している。

戦後の文化復興の象徴である総合雑誌などが、東京で次々と創刊される中、関西発の文学雑誌の創刊を企図したのが貴司山治^{（しやまじ）}であった。貴司は徳島県鳴門市出身の作家で、一九二〇（大正九）年、「紫の袍」が『大阪時事新報』の懸賞小説に入選（選外三等）したのを機に、同紙の記者となり、小説家の松岡譲や評議会の野田律太をはじめ、関西に在住していた多くの文化人や活動家と交流を深めた。上京後、主に大衆作家として活躍していたが、少年労働者が階級的に自覚する過程を描いた小説「止まれ、進め」を『東京毎夕新聞』に連載（一九二八年八月―一九二九年四月二六日、のち『ゴー・ストップ』と改題）したことが機縁となり、一九二九年（昭和四）年二月に設立された日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）へ加盟する。しかし、一九三二年四月に治安維持法違反で検挙されて長期勾留、翌々年の一九三四年一月にも再び検挙されると、政治的転向を表明した。なお、二度目の検挙直後の二月には、貴司の留守宅でナルプの解散決議が採択されている。

ナルプが解散し、転向を表明した後も、貴司は合法的なプロレタリアジャーナリズムによる抵抗運動を模索した。一九三五年五月には、丸山義二らと文学案内社を設立して、『文学案内』『詩人』『実録文学』といっ

た雑誌を創刊している。だが、一九三七年一月に治安維持法違反で再び検挙され、一年近く勾留されると、雑誌『文学案内』も第三巻第四号（一九三七年四月）で終刊となり、今度は完全転向を余儀なくされた。^②

こうしてプロレタリア作家として挫折した貴司であったが、その後、大衆作家として息を吹き返した。特に、一九四一年頃から国策に準じた時代小説を多く著している。しかし、一九四二年九月の読売新聞第一線の会（読売新聞寄稿家の会）において、海軍大佐の平出英夫からミッドウェー沖の敗戦を告げられると、日本敗北必至の状況を知って再び混迷し、翌年九月、死地を求める気分で「内蒙古」へ旅立ち、「蒙古」や「華北」を放浪した。そして、約二カ月の放浪生活の後に帰国した貴司は、作家生活には戻らず、同じくプロレタリア作家であった加賀歌二（谷口善太郎）とともに丹波山中の船井郡胡麻郷村（現南丹市）へ疎開（入植）し、開墾生活を行った。

終戦後、貴司は胡麻郷村に留まり、一九四六年六月には胡麻郷開拓農民組合の組合長に就任、また、同年一月には全日本開拓者連盟の中央常任委員となるなど、精力的に開拓農民運動を推進していた。^③しかし、それと同時に、自らの作家活動についても、その再起に向けて意欲的に取り組んでいた。一九四五年一〇月二五日に書かれた貴司の「日記」には、次のように記されている。

午後京都、北川宅によんでおいた牧野弘之君にあふ。維新前夜再刊の話、文学雑誌発刊の話など。^④

小説「維新前夜」は、『読売新聞（夕刊）』に一九四〇年十一月一六日から四一年一〇月一日にかけて全二四二回が連載され、春陽堂から全七巻の単行本（一九四一年七月―四四年五月）も刊行されたが、用紙節減のため連載打ち切りとなったこともあり、未完のままに終わっていた。文学雑誌の発刊も、『文学案内』の事実上の強制廃刊によって中断していた仕事で

ある。牧野弘之については後述するが、貴司は戦争で断絶した自らの仕事を回復させようと、終戦から約二カ月後に早くも動き出していたのである。

そんな貴司の再起を後押ししたのが、弘文社の湯川松次郎（湯川松次郎）であった。現在の和歌山県御坊市に生まれた湯川は、当時大阪屈指の書籍小売店であった小谷書店で丁稚奉公をし、一九〇九（明治四二年）に独立して、大阪市東区平野町四丁目に明文館を創業した。一九一四（大正三三年）には南区松屋町筋に移転、明文館は小売店であったが、一九二〇年頃から取次ぎの傍ら大衆向け出版に手を染め、業務を拡大する。一九二三年には東区備後町一丁目に移転して社名を湯川弘文社に改め、学術図書にも出版範囲を拡張し、一九二五年には学習社の称号も併用して現在のテスト本（赤本）の元祖を出版するなど、特に参考書出版の分野で確固たる地位を得た。一九三〇（昭和五）年八月には東区順慶町一丁目に社屋を新築、翌年九月には東京市神田区錦町二丁目に支店を開設するなど、上方出版界の有力者の一人となった湯川であったが、一九四五年、戦災で順慶町の社屋を焼失してしまう。そして終戦後、藤沢桓夫の旧宅を譲り受けて社屋を住吉区上住吉へ移転し、社名を弘文社へと改称して営業を再開した。^⑤

戦前の弘文社は、教科書や参考書を主軸に据えながら、文芸出版も行うという経営スタイルをとっていた。そもそも関西では、プラトン社が一九二二（大正一一）年から二八（昭和三）年にかけて『女性』や『苦楽』といった雑誌を発行し、また、同時期に藤沢桓夫、神崎清らが同人誌『辻馬車』（一九二五年三月―一九二七年一〇月）を発行するなど、関東大震災（一九二三年）の後に独自の文芸文化が形成されていた。しかし、元来から関西の多くの出版社は、売り上げのよい実用書ばかりに力を注ぎ、文芸などの出版物を軽視する傾向にあった。そのため、東京の出版界が震災から復興すると、文化拠点は再び関東へと流れていった。このような



写真1：『東西』創刊号の表紙

上方出版界の特殊な背景があり、弘文社も文芸出版を主軸に据えることができなかったのである。

弘文社主の湯川松次郎は、こうした上方出版界の盛衰を直接経験した人物であった。湯川は、良識的な文化文芸出版が関西で立遅れて振わなかった理由について、次のように述べている。

かくして経営上大阪出版物は雑書参考書と制約をうけてその範囲内で出版するか、若しくは東京へ居を移さざるを得ないのである。大阪出版者側からすると在住の著者及び地元には読者層の少ない文芸出版はやりにくい。又著者の方にと出版屋が少ない、出版されても多く捌かない出版屋を相手に大阪に居れない。従来は大阪、関西で良い著者が出来た場合でもだめとなった^⑥。

もちろん、これは事後的回想ではあるが、終戦後の湯川にもこうした

問題意識が働いていたであろう。そこに、雑誌編集の経験があり、さらに関西の文化人、大衆作家、プロレタリア作家にわたる幅広い人脈を持つ貴司が現れ、湯川は雑誌発行のスポンサーとなることを快諾する。このように、『東西』が創刊された背景には、戦後の再起として文学雑誌の発刊を企図した貴司の意欲と、関西に良識的な出版物を定着させたい湯川の野望という二つの要因があった。

二

ここで『東西』の「編集人」の変遷について触れておきたい。『東西』の奥付を確認すると、創刊号（一九四六年四月）から第一巻第四号（四六年八月）にかけての「編集人」は、前掲の「日記」の引用文で登場した牧野弘之となっている。牧野は、貴司山治の大阪時代からの知友で、戦前に日本共産党へ入党し、全協関東地方のオルグや『戦旗』の組織部長などを務めたが、検挙されて転向し、一九三五年以降は主に関西で活動していた。関西では、堂ビル学院という辻嘉一の料理学校が出していた雑誌の編集をしながら、大衆文学や脚本を書き、また、新児童文学集団に参加して少国民文学運動を推進し、第一次・第二次『新児童文学』の編集に携わった^⑦。関西における牧野のこうした文化運動も、『東西』の誌面を埋める大きな下支えとなっていたであろう。牧野はその後、『東西』の編集を離れて自ら民衆書房という出版社を立ち上げ、藤沢桓夫の書いた児童書などを刊行した^⑧。

牧野の降板の後、第一巻第五号（一九四六年九月）と第六号（一九四六年一月）の「編集人」となったのは、堤重久であった。堤は太宰治の一番弟子で、同作家の研究者としても知られているが、彼は太宰の紹介で貴司と仕事をすることになったようである。太宰治の堤重久宛書簡

(二九四六年二月九日付)には次のように書かれている。

御手紙拝誦。原稿も拝見。いいところもありますから、あれを京都市東山区、新門前梅本町、「東西」編集所の貴司山治氏にお渡しなさい。貴司さんには、私から君のことを言つて置きましたから。貴司さんとは私は逢つた事は無いけれども、安心できる人物のやうです。(中略)なほまた原稿の事だけでなく、その他、生活の事でも貴司さんに何でも相談してみるとよろしい。親切にやつてくれると思ひます。

前述したように、堤が「編集人」として奥付に記載されるのは第一巻第五号からであるが、実際に編集に携わつたのは第四号からである。同号からはエスペランティストの栗栖継も編集に加わつており、編集者たちによる充実した作品合評や書評が掲載されている。しかし、堤はその後、

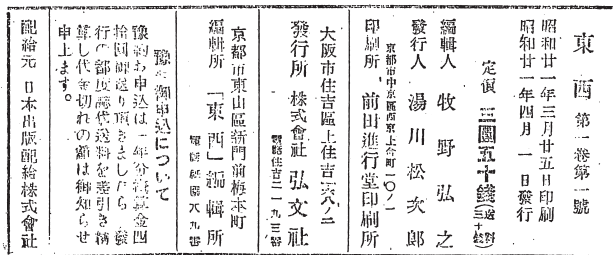


写真2：『東西』創刊号の奥付

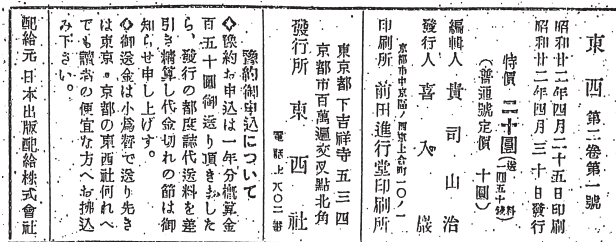


写真3：『東西』第2巻第1号の奥付

東京へ向かい、彼もまた『東西』の編集から離れることとなった。第一巻第六号から『東西』はしばらく発行されず、五カ月後によく出された第二巻第一号(二九四七年四月)では、貴司山治が「編集人」となった。「編集人」として貴司の名が記載されているのは、最終号となったこの号のみである。しかし、実際は彼が全号にわたつて編集責任者となつていた。

次に「発行人」・「発行所」について、創刊号から第一巻第六号までは、湯川松次郎・株式会社弘文社(大阪市住吉区上住吉一六八ノ二)となつており、第二巻第一号では、喜入巖・東西社(東京都吉祥寺五三四ノ京都市百万遍交差点北角)となつている。湯川と弘文社については先述したので割愛するが、後者の喜入巖は、元・日本プロレタリア美術家同盟員であり、ナルプが発行していた『文学新聞』の小説の挿絵を描くなど、貴司とは戦前からの繋がりがあつた。しかし、『東西』の第二巻第一号を確認しても、喜入の描いた挿絵は見当たらず、おそらく第二巻第二号以降から本格的に参加する予定であつたのだろう。また、東西社の二つの住所について、東京の住所は疎開のため貴司が戦前に離れていた吉祥寺の自宅であり、京都の住所は、第二巻第一号の「あとがき」に「新事務所は百万遍アパートの中である」と述べられているとおりである。

最後に、「印刷所」と「編集所」について、『東西』全号の「印刷所」となつている前田進行堂印刷所(京都市中京区西京上合町一〇ノ一)は、京都測候所(現、京都地方気象台)の近くにあつた印刷会社で、一九六〇年頃には倒産して現存していない。『京印季報』六〇二号(二〇〇八年四月)によると、前田進行堂の社長であつた前田政吉は、一九五四年から五九年にかけて京都府印刷工業調整組合の理事長を務めており、比較的大きな会社であつたと推定できる。また、創刊号から第一巻第六号まで「編集所」として記載のある「東西」編集所(京都市東山区新門前梅本町)は、

白河に面した空き屋を貴司が交渉し、事務所として借りたものである。一九四五年二月二七日に書かれた貴司の「日記」に「牧野君おそくくる。事務所の費用二千円をうけとる」とあるように、事務所費用も弘文社が援助していた。

三

『東西』を創刊した意図は、創刊号の「あとがき」に「今の世の灰色の生活にかはいた諸君の心に、この一冊の『東西』が少しでもやはらぎとゆるほひをおくることとなれば本望」とあるように、戦争によって廃れた文化を復興し、読者の文化的欲求を満たすことにあった。『東西』と並行して刊行が企画された「東西叢書」の広告にも、「この本を現代の文化的空白に悩む若き人々に贈りたい。そしてこの本を荒廃の中に棲む人々の心のうるほひとはげましの糧としたい」と述べられている。また、創刊号の巻頭詩、千家元磨の「今や吾等の慎重に考へる時だ」には、「戦争は終つた。今や吾等の為した事を考へ／これから為す可き平和の事業を慎重に慎重を重ねて考へ／国の内外の平和の為に皆用意しなければならぬ」と書かれており、荒廃の中の新日本の再建という、雑誌『東西』の立場が示されている。

『東西』の特徴は、「文学雑誌」と銘打ったように、様々なジャンルの文学作品を掲載したことにある。千家元磨や北川冬彦、田木繁を中心に詩が多く掲載され、創刊号から連載の始まる加賀耿二「草の塚」(全五回)や貴司山治「しら河」(全三回)などの小説があり、評論では、武田祐吉の「万葉集の人生」が全五回にわたって連載され、奈良時代の生活や文学状況について論じているほか、一九四六年一月三〇日に死去した河上肇の追悼記念として書かれた住谷悦治の「思想的に観た河上肇博士」

(全四回)は、河上肇の評伝として興味深い内容となっている。また、貴司の最初の妻恵津の姉婿である江原鈞の随筆「野草食譚」が、大家の作品と並んで連載され、同じく貴司と関わりの深い藤森成吉が、俳句、小説、随筆と、様々な作品を書いて誌面を賑わせているなど、貴司の縁戚者や友人の活躍が見られるのも、この雑誌の特色であるといえよう。

こうした多岐にわたる作品を掲載できたのは、当然それだけの人材が揃ったからでもある。黒川創が『東西』について、「この雑誌は一地方での小出版物でありながら、文名のある豊富な執筆陣を擁しており、左翼作家時代から変わらず人脈を保つことができた、貴司の人柄の一面をうかがわせる」と述べているように、貴司の人脈が著名な執筆者の確保に大きく貢献したことは間違いない。特に、貴司が戦前発行していた『文学案内』と多くの執筆者が共通しており、第二巻第一号の「あとがき」には、そもそも『東西』そのものが『文学案内』の復活のつもりである旨が記されている。それを示すように、先述した千家元磨らの詩、加賀耿二の連載小説のほか、徳永直の創作方法に関する評論、八田元夫の演劇時評、新島繁のドイツ文学の紹介などが『東西』には書かれているが、これらは全て『文学案内』と同じ役回りであった。

しかし、『東西』の執筆者全員が貴司山治の人脈によるとは限らない。佐々木信綱や武田祐吉、川田順、新村出、吉井勇などは、戦前・戦中の文学活動を通して、貴司とそれほど深い関係があるわけではない。こうした大家たちは、おそらく弘文社との縁で執筆者に名を連ねたのである。たとえば、佐々木信綱と武田祐吉は、一九三五年に当時国語教科書として第一位の採用数であった湯川弘文社の『国語読本』(中等教科書)を編纂しており、また、川田順は『偶然録』(一九四二年)を、新村出は『朝霞随筆』(一九四三年)、吉井勇は『歌境心境』(一九四三年)をそれぞれ湯川弘文社より刊行していた。貴司の人脈と弘文社の実績、この二つが合

わさり、『東西』の誌面は多彩な執筆者の筆で覆われていったのである。

また、第一巻第六号の「あとがき」に、「『東西』を日本における本格的な文芸雑誌にそだてあげたいと思つてゐる。／＼本誌は京都で編集して大阪で発行してゐるのだけれど、地方的な雑誌といふわけではない」と編集方針が示されているように、その内容は「一地方での小出版物」に留まらないほど充実していた。第一巻第二号には、貴司山治と太宰治、貴司山治と中野重治、それぞれの往復書簡が掲載されており、特に前者は、戦後の太宰の思想的立場を示すものとして度々引用される。また、第一巻第四号の志賀義雄「明日の文学にのぞむ」、徳永直「民主主義文学の運動について」や、第二巻第一号の小田切秀雄「人間追及の道―文学の課題と方法―」などは、同時期の『近代文学』と『新日本文学』における「政治と文学」論争、民主主義文学論と接続する論文として見逃せない。その他、第一巻第四号の「あとがき」に、「国内の文学復興について、しばらくは鎖国日本となつたわれわれに、どうしても必要なのは世界の文学の動向である」とあるように、この号以降、積極的に外国文学の紹介がなされており、とりわけ栗栖継の翻訳したアンドロイ・ホロヴゴ「赤いプラトック」（第一巻第四号）、コツユビンスキイ「蜃気楼」（第一巻第六号・第二巻第一号）という二篇のウクライナ文学の掲載は、同時期の雑誌の中でも異彩を放っていた。

こうして貴司山治の編集の下に様々な試みがなされたのであったが、弘文社の撤退もあり、『東西』は第二巻第一号（一九四七年四月）を以て廃刊となつてしまふ。わずか一年、しかも月刊誌でありながら年間七号しか発行できなかつたことは、雑誌ブームの反動によつて自然淘汰が生じるその後の出版界の状況を早くも体現していた。第一巻第二号の「あとがき」に「用紙欠乏の甚だしい現在、定期刊行を維持するため、急に発行部数もふやせない状態」であると述べられているように、特に用紙不

足は深刻であつた。一九四六年の紙の生産量は、戦前で最も多く生産された一九四〇年のわずか七パーセントに過ぎず、そのため、国家総動員法に基づく「紙配給統制規則」が戦後も存続して機能し、出版社は用紙割当の制限内で書籍や雑誌を刊行しなければならなかつた。^④しかし、一月六四頁という規制を、発行部数を落とすことによつて八〇頁にし、また、合併号にして二月分の頁数で発行するなど、文学雑誌として充実した内容を維持するため、貴司は様々な工夫をしたのであつた。

最終号となる第二巻第一号の発行は、第一巻第六号（一九四六年一月）の発行から約五カ月後のことであつたが、ここには貴司山治の雑誌編集に対する執念が表れていた。同号の「あとがき」には、次のように記されている。

出版界の整理が行はれ、用紙の公定価格配給が復活するかぎり「東西」は制限頁数内でつゞけて発行してゆくことに変りはない。前発行所の弘文社からはなれ、今後は私の全責任で新たに東西社を設立した。東西は東京と京都とに事務所をおき、両方で雑誌「東西」の外、文学図書の出版をもやつて行く。

ここで貴司は、弘文社から独立し、自力で雑誌の発行を継続する意志を示しているが、結局これが実現することはなかつた。しかしながら、全七号で廃刊となりながらも、戦後の雑誌ブームの渦中で、こうした多彩な内容の文学雑誌が関西で出版されていたことの意義は大きいだろう。貴司はこの後、一九四八年一月に再び東京に居を移して文筆生活に入つていくが、一九五三年六月に彼が設立した新聞通信社「作家クラブ」（後「文芸社」と改名）の機関誌『作家クラブ』（一九五六年七月創刊、五七年一月より『作家新聞』と改題）や、一九六一年三月に徳島出身の作家らで創立した「暖流の会」の機関誌『暖流』（一九六一年一〇月創刊）など、その後も貴司は出版事業や雑誌編集に携わつていった。

注

- ① 戦後の雑誌ブームの背景については、『新生』復刻版・別冊解説（日本近代文学館、一九八〇年一月）を参照。
- ② 『文学案内』の背景については、浦西和彦「解題」（『復刻版 文学案内・別冊』不二出版、二〇〇五年六月）を参照。
- ③ 貴司山治と開拓農民運動の関係については、安岡健一「敗戦後の疎開文人による社会運動——京都府胡麻郷開拓地における貴司山治を事例として——」（『新しい歴史学のために』第二七三号、二〇〇九年五月）に詳しい。
- ④ 『貴司山治全日記 DVD・ROM版』（不二出版、二〇一一年刊行予定）
- ⑤ 弘文社の社史については、『昭和十年度版 全国書籍商総覧』（新聞之新聞社、一九三四年九月）、『現代出版業大鑑』（現代出版業大鑑刊行会、一九三五年八月）、および『日本の書店百年』（青英舎、一九九一年七月）の「弘文社略年表」を参照。文献間で社屋の移転年度などに揺らぎがあるが、なるべく古い物を基準とした。なお、弘文社はその後、国家試験・資格受験図書専門の出版社となり、一九四九年に阿倍野区相生通に移転した後、一九七七年に現在地である東住吉区中町二丁目に新社屋を建築した。
- ⑥ 湯川松次郎「上方の状況と文化」（『上方の出版と文化』上方出版文化会、一九六〇年四月）
- ⑦ 牧野弘之については、『新児童文学 40周年記念誌』（一九八二年九月）掲載の大蔵宏之「されぎれの想い出」、および阿貴良一「牧野弘之君のこと」を参照。なお、牧野が新児童文学集団に参加した当時の筆名は夏目弘である。牧野は戦後、自己批判をして日本共産党へ再入党し、関西地方委員会の文化部長や、全国労音の事務局長などを務めている。
- ⑧ 民衆書房は一九四七年一月に小林多喜二の『党生活者』を刊行しており、これには貴司山治が関わった可能性が高い。この民衆書房版『党生活者』の背景については、伊藤純「小林多喜二の死と貴司山治——貴司を出

所とする「党生活者校正刷」（小樽文学館所蔵）をめぐって」（『水脈』第九号、二〇一〇年三月）に詳しい。

⑨ 堤重久『太宰治との七年間』（筑摩書房、一九六九年三月）

⑩ 同④

⑪ 江原鈞（金兵衛）の息子と藤森成吉の娘は、貴司の仲介によって結婚している。

⑫ 黒川創「解説」（『占領期雑誌資料体系 文学編Ⅰ・第一巻』岩波書店、二〇〇九年一月）

⑬ この太宰治の貴司山治宛書簡については、『太宰治全集Ⅱ』（筑摩書房、一九九九年三月）に原稿を底本としたものが収録されており、黒川（前掲）が指摘するように、初出（『東西』）と比較すると、「マ司令へ」が「どこかへ」、「共産党」が「民主主義者」に改められているなど、貴司の検閲に対する配慮が見られる。なお、プランゲ文庫には『東西』第一巻第一号から第六号が収められているが、全号が検閲をパスしている。

⑭ 戦後の雑誌の出版事情については、『日本雑誌協会史・第二部・戦中戦後期』（日本雑誌協会、一九六九年九月）を参照。

付記

本稿の執筆に際して、貴司山治の長男である伊藤純氏に『東西』全号をご提供いただき、解題についても様々なご教示を賜りました。また、本稿は本学の教員・院生を中心に結成された貴司山治研究会（代表・本学文学部教授中川成美）の研究成果の一部でもあります。伊藤氏ならびに研究会の諸氏に、末筆ながら深謝申し上げます。

（本学大学院博士後期課程）

『東西』総目次

凡例

- 一、雑誌名に添えた年号は創刊および終刊をあらわす。
- 一、表紙に創刊号や特集号とある場合、各号の見出しの年号の横にそれを添えた。
- 一、細目は原則として本文から採った。副題も採ることを原則とした。
- 一、仮名遣いは原文のままとし、旧漢字、異体字はそれぞれ新漢字、正字に改めた。また、明らかな誤植、脱字以外はすべて本文のままとした。
- 一、作品が小説か、詩か、評論か随筆かなど、ジャンルについては本文に断っていない場合が多いため、*印を付して題名下の()内に説明を加えた。書評や作品合評の場合は、中見出しのあるものはそれを採った。
- 一、作品に執筆年月日などが付されている場合のみ、「摺筆」として本文のまま注として採った。
- 一、広告欄がはさまっているページはこれを明記し、広告の内容を注として採った。
- 一、著者名の下段の数字はページ数をあらわし、ページ数が付されていない場合には頁数に()を付した。
- 一、翻訳の場合、海外の著者名には種々の表記がもちいられるが、すべて本文のままとした。
- 一、注の部分で/印は改行を意味する。
- 一、創刊の意図など、特に意味があると思われる場合は編集後記などの一部または全文を注として採った。
- 一、作成にあたっては、『現代日本文芸総覧』（大空社、一九九二年）を参照した。

『東西』^{*注1}

昭和二十一年四月—昭和二十二年四月（全七号）

八六

第一卷第一号 昭和二十一年四月号 一日発行

—創刊号—

廣告 ^{*注2}	今や吾等の慎重に考へる時だ（*詩） ^{*注3}	千家 元麿	四—六
売立て（*小説）	詩人の話（*小説）	藤森 成吉	七—二二
近時断想（*随筆）	老学庵にて（*随筆） ^{*注4}	藤沢 桓夫	一三—二四
教養（*随筆）	浅間つれづれ（*随筆）	間宮 茂輔	二五—二七
	文学に於ける数理のやうな透明なものに就いて（*評論）	新居 格	二七—二九
		小泉 琴三	二九—三一
		沖野岩三郎	三一—三三
寒風（*俳句・十句）		三枝 博音	三四—三九
桜の園の上演に就て（*時評）		藤森 成吉	三九
春の耕人—万葉集の人生 一—（*評論）		八田 元夫	四〇—四二
廣告 ^{*注5}		武田 祐吉	四三—四五
東西漫歩（*随筆）		四四	
科学者の言葉—二 山片幡桃—（*評論）		新村 出	四六—四七
わがまま随筆		大久保恒次	四八—五〇
夢（*短歌・十首）		藤森 成吉	五一—五三
風流老残の賦（*短歌・十首）		佐佐木信綱	五四
冬の動物（*短歌・八首）		吉井 勇	五五
		川田 順	五六

(〇)

文化人だより *注6

雀の宿（*詩）

小野十三郎 五八一—六〇

麦三章（*詩） *注7

田木 繁 六〇—六一

森蔭を望んで、車窓にて（*詩・二篇）

北川 冬彦 六二—六三

寄贈新刊紹介

六二—六三

河上肇先生の記念のために（*追悼文） *注8

六四—七四

—晩年の河上先生（斎藤榮治）、浮雲太空—河上先生をおくる—（加賀歌

二）—

しら河（*小説）

貴司 山治 七五—八五

草の塚（*小説）

加賀 耿二 八六—九五

あとがき *注9

貴司生 九六

広告 *注10

（九七）

広告 *注11

裏表紙

注

*注1 編集 貴司山治、装画 田村孝之介（全号）／発行人、発行所 湯

川松次郎・株式会社弘文社（第一巻全号）、喜入巖・東西社（第二巻第一

号）

*注2 弘文社—、和辻春樹『生活の科学』、飯島幡司『平和の扉』、宇野浩

二『童話集 龍介の天上』、小川未明『童話集 銀河の下の町』

*注3 摺筆—昭和二十一、二、二

*注4 摺筆—十二月末日、伊豆の山村にて

*注5 大雅堂—総合雑誌「時論」

*注6 山本修二、野淵昶、絲屋寿雄、住谷悦治、斎藤茂吉、川田順、石濱

純太郎、新島繁、土方与志、岡本潤、頼原退蔵、岡沢秀虎、小穴隆一、伊

吹武彦、式場隆三郎、米川正夫、鈴木安蔵

*注7 摺筆—一二、一、三

*注8 「昭和二十一年一月三十日四時五十三分、河上肇先生は京都市吉田

上大路九番地の寓居において逝去せらる。享年六十八。先生の一生は現代

日本人の大きな一つの典型である。その残された学問的功業と、生涯の意

義はまことに大きいと思ふ。先生命終の地に生れた「東西」誌上に、先生

と最もゆかりの深い京都の三人の人に囑託して、ここに河上先生記念の

ページをつくる。ことに次号以下に連載する住谷悦治の「思想的に観た

河上肇博士」は雄大な研究論文である。（編集者）」

*注9 「◇「東西」創刊号を諸君におくる。今の世の灰色の生活にかはい

た諸君の心に、この一冊の「東西」が少しでもやはらぎとうるほひをおく

ることとなれば本望」◇はじめは多少文学以外の原稿ものせようと思つ

たが、よく考へてみてやはり純文学雑誌とした。（後略）」◇今日の日本

人は胃の腑には飯を、心には美と平和を一番切望してゐると思ふ。そし

て、美といひ平和といひ、それは人間の知性の姿である。正しい情意の姿

である。それが世に実現され、人々の生活の上に与へられなければ不幸は

のぞかれない。近頃の叫喚や号令に、今の日本人が動かうとしないのはむ

しろいいことである。」◇「東西」は諸君の胃の腑に飯を与へる力はない

が、その心によきやはらぎとうるほひを与へる器（うつは）として、諸君

から愛されるやうな、さういふものにつくりたい。気をつけ、意をそそい

でさうしたい。」

*注10 弘文社—新選小説文庫、村松梢風『残菊物語』、藤沢桓夫『横顔』、

木々高太郎『就眠儀式』、貴司山治『岡上樹庵』

*注11 弘文社—東西叢書、藤森成吉『何が彼女をさうさせたか』、藤沢桓

夫『傷だらけの歌』、貴司山治『舞踏会事件』

第一巻第二号 昭和二十一年五月号 一日発行

（〇）

思想的に観た河上肇博士(1)（*評論） 住谷 悦治 四—一〇

風（*小説） 間宮 茂輔 一一—一九

寒明け、汽車中にて（*俳句・十句） 藤森 成吉 一九

文学的通信

二〇―二九

―太宰治君への手紙(貴司山治)、返事の手紙(太宰治)、貴司への返事をかねて(なかの・しげはる)、中野重治へ(貴司山治)―

憑かれた精神(*評論) *注2

三枝 博音 三〇―三三

続風流老残の賦(*短歌・十首)

吉井 勇 三四

民こそ継がめ(*短歌・十一首)

土岐 善磨 三四―三五

雪山花境(*短歌・七首)

武田 祐吉 三五

東京新劇通信

八田 元夫 三六―三九

冬の村で(*詩)

千家 元磨 四〇―四一

引上げの人(*詩)

北川 冬彦 四一

植物達は夜生長する(*詩)

田木 繁 四一―四二

砲塔旋盤(*詩)

小野十三郎 四二

気中の高土(*詩)

岡田 播陽 四三

科学者の言葉―二 新井白石―(*評論)

大久保恒次 四四―四五

野草食譚(*随筆)

江原 鈞 四六―四八

寄贈新刊紹介

阿部 知二 四九―五〇

漂浪の苦味―身辺消息―(*随筆)

上林 暁 五〇―五二

正月以来(*随筆)

小田 嶽夫 五二―五三

谷間の寺で(*随筆)

新居 格 五三―五五

老学庵にて―帰る前東京での感想―(*随筆)

新居 格 五三―五五

美しき狩獵―万葉集の人生 二―(*評論)

武田 祐吉 五六―五九

わがまま随筆―講演―

藤森 成吉 六〇―六二

草の塚(*小説)

加賀 耿二 六三―七一

しら河(*小説)

貴司 山治 七二―七九

広告 *注4

七九

あとがき

貴司生

八〇

広告 *注5

(八二)

広告 *注6

裏表紙

八八

注

*注1 弘文社―村松梢風『東海美人伝』、貴司山治『洋学年代記』

*注2 摺筆―二月十一日

*注3 弘文社―宇野浩二『龍介の天上』、小川未明『銀河の下の町』、和辻春樹『生活の科学化』、村松梢風『残菊物語』、藤沢桓夫『横顔』、藤森成吉『何が彼女をさうさせたか』

*注4 弘文社、和辻春樹『生活の科学』、飯島幡司『平和の扉』

*注5 弘文社―新選小説文庫、村松梢風『残菊物語』、藤沢桓夫『横顔』、木々高太郎『桜草』、貴司山治『岡上樹庵』、子母沢寛『名月赤城の山』

*注6 弘文社―東西叢書、藤森成吉『何が彼女をさうさせたか』、藤沢桓夫『傷だらけの歌』、貴司山治『舞踏会事件』、間宮茂輔『鯨』、村山知義『処女地』

第一卷第三号 昭和二十一年六月号 一日発行

広告 *注1

(〇)

アメリカの一東洋学者(*回想)

石濱純太郎 四一七

河上博士の「日本尊農論」について(上)―思想的に観た河上肇博士(2)

―(*評論)

住谷 悦治 八一―一二

旅九日、植野氏に(*俳句・十五句)

藤森 成吉 一二

正義以上のくらしから(*随筆)

岩倉 政治 一三―一五

浅間つれづれ(*随筆)

沖野岩三郎 一五―一七

刀狩(*随筆) *注2

松岡 讓 一七―二〇

広告 *注3

二〇

山羊の子と時局（*随筆） 浅原 六朗 二一—二三
 広告*注4 二二三

ダツタン海峡—ダツタンの南、北海道の牢獄にある人民革命の同志たち
 に—（*詩）*注5 槇村 浩 二四—二五

初夏の喜び（*詩） 千家 元磨 二六—二九
 復員悲歌（*詩・五篇） 谷村 博武 二九—三一

惜別—朝鮮の若い友達へ—（*詩・十二篇） 小野十三郎 三二—三四
 野草食譚（*随筆） 江原 鈞 三五—三六

文化人だより*注7 小西 英夫 三七—三八
 日本敗戦歌（*短歌・十三首） 渡辺 順三 三九—四〇

デモの列（*短歌・十首） 結城 健三 四〇—四一
 早春の峽（*短歌・十二首） 牧野 弘之 四一—四二

関西文化通信 藤森 成吉 四三—四五
 わがまま随筆—春の旅— 長沖 一 四六—五三

遺書（*小説） 貴司 山治 五五—六四
 広告*注8 五四

しら河（*小説） 貴司 山治 五五—六四
 広告*注9 六四

草の塚（*小説） 加賀 耿二 六五—七九
 貴司生 八〇

あとがき 八〇
 広告*注10 (八一)
 裏表紙 八〇

広告*注11 裏表紙

注

*注1 湯川弘文社—『村松梢風選集』、藤沢桓夫『花言葉』

*注2 摺筆—二一、二、二五

*注3 湯川弘文社—貴司山治『洋学年代記』

*注4 日光書院—スミダノフ（著）・須田正継（訳）『アルタイ紀行』

*注5 摺筆—一九三四年十月二十五日

*注6 三一書房—加賀耿二（旧須井一）『綿』

*注7 三好十朗、岡麓、小川未明、豊田三郎、江森盛弥、秋沢修、八木隆

一朗、樺俊夫、木村毅、河武繁俊、杉森孝次朗

*注8 湯川弘文社—美術雑誌「ぱれつと」

*注9 湯川弘文社—児童図書、宇野浩二『童話集 龍介の天上』、小川未明

『童話集 銀河の下の町』、新児童文学集団『童話集 天狗の別荘』、新児童

文学集団『童話集 動物列車』、栗栖継『童話集 熊と線路番』、実野恒久『科

学物語 僕等の知恵袋』

*注10 湯川弘文社—金子健二『アメリカ文化史』、飯島幡司『平和の扉』、

武田祐吉『万葉自然』、和辻春樹『生活の科学化』

*注11 湯川弘文社—新選小説文庫、村松梢風『残菊物語』、藤沢桓夫『横

顔』、木々高太郎『桜草』、鷺尾雨工『断絃』、貴司山治『岡上樹庵』、子母

沢寛『名月赤城の山』—東西叢書、藤森成吉『何が彼女をさうさせたか』、

藤沢桓夫『傷だらけの歌』、貴司山治『舞踏会事件』、間宮茂輔『鯨』、村

山知義『処女地』

第一卷第四号 昭和二十一年七月・八月号 八月一日発行

—夏季特別号—

広告*注1 (〇)

明日の文学にのぞむ（*評論） 志賀 義雄 四一五、一四

時代への適応（*評論）*注2 石川 達三 六一—一

政府諸公への教訓歌（*詩） エモリ・モリヤ 一〇—一一

- 民主主義文学の運動について（*評論） 徳永 直 一二―一四
 関西の演劇の問題について（*評論） 村山 知義 一五―二二
 太平洋戦争後のアメリカ文学―サロオヤンのことども―（*評論） 清水 光 二三―二八
 ハウプトマンの作風と『沈鐘』―覚え書の試論―（*評論）^{*注3} 新島 繁 二九―三二
 ウクライナ文学と日本―「赤いプラトック」について―（*評論） 栗栖 継 三三―三八
 一仏文学者の手記―第二次大戦とフランス文学（二）―（*回想）^{*注5} 新村 猛 三九―四三
 郭公（*俳句・十二句） 藤森 成吉 四三
 形影居日録（*短歌・四十六首） 吉井 勇 四四―四七
 東西漫歩（*随筆） 新村 出 四八―四九
 森鷗外の墓（*随筆）^{*注6} 上林 暁 五〇―五三
 白髪 of 太郎（*随筆） 佐多 稲子 五四―五七
 広告^{*注7} 北川 冬彦 五八―六七
 愛情抄（*詩・七篇） 藤森 成吉 六八―七〇
 わがまま随筆 千家 元麿 七一―八七
 妻の死を悼んで（*詩） 武田 祐吉 八八―九一
 旧衣新衣―万葉集の人生 三―（*評論） 江原 鈞 九二―九三
 野草食譚（*随筆） 九四―九七
 書評
 ―近藤春雄『現代支那の文学』（貴司山治）、ボリス・ゴルバートフ著／黒田辰男訳『降服なき民』（栗栖継）、アンドレイ・ジイド著／伊吹武彦訳『架空のインタヴュー』（堤重久）、白井喜之介『童説』（堤重久）、渡邊

義通他『日本歴史教程』（貴司山治）― 九八―一〇一
 作品月評

―宮内寒弥『艦隊葬送曲』（堤重久）、鹿地亘『平和村記』（栗栖継）、太宰治『冬の火花』（堤重久）、三好十郎『崖』（堤重久）、徳永直『妻よねむれ』（貴司山治）、井伏鱒二『二つの話』（堤重久）―
 草の塚（*小説） 加賀 耿二 一〇二―一〇五
 雨の中を（*小説） 和田 伝 一一六―一二九
 白い箱（*小説）^{*注8} 岩倉 政治 一三〇―一四二
 赤いプラトック（*小説）

アンドレイ・ホロヴゴ（栗栖継訳）一四三―一五九
 芸術について（*格言）^{*注9} 貴司生 一五九

あとがき 一六〇

広告^{*注10} 裏表紙

広告^{*注11}

注

*注1 弘文社―『村松梢風選集』、村松梢風『残菊物語』

*注2 摺筆―六月九日

*注3 摺筆―七、七

*注4 弘文社―金子健二『アメリカ文化史』

*注5 摺筆―一九四六・七・二一

*注6 摺筆―昭和二十一年七月十一日

*注7 湯川弘文社―児童図書、宇野浩二『童話集 龍介の天上』、小川未明

『童話集 銀河の下の町』、新児童文学集団『童話集 天狗の別荘』、新児童

文学集団『童話集 動物列車』、栗栖継『童話集 熊と線路番』、実野恒久『科

学物語 僕等の知恵袋』

*注8 摺筆―一九四六・六・二九

*注9 ゴーリキイ、ヘーゲル、ハイネ、モーパッサン、プラトン

*注10 弘文社―藤沢桓夫『花言葉』、藤沢桓夫『横顔』、和辻春樹『生活の科学化』、武田祐吉『万葉自然』

*注11 弘文社―東西叢書、藤森成吉『何が彼女をさうさせたか』、藤沢桓夫『傷だらけの歌』、貴司山治『舞踏会事件』、間宮茂輔『鯨』、村山知義『処女地』―新選小説文庫、村松梢風『残菊物語』、藤沢桓夫『横顔』、木々高太郎『桜草』、鷺尾雨工『断絃』、子母沢寛『名月赤城の山』

第一卷第五号 昭和二十一年九月号 一日発行

ナチス・ドイツの恐怖政治の暴露―強制収容所の小説―(*評論) (〇)

ドライザーの遺作『城壁』(*評論) 舟木 重信 三一―九

芸術家の言葉(*格言) *注2 松本 正雄 一〇―一四

遠方の友―残雲軒夜話―(*随想) 石濱純太郎 一五―二〇

豊年(*俳句・十句) 藤森 成吉 二〇

在米の旧友をなつかしみて―エリセイエフ君の事―(*回想) 新村 出 二一―二五

庭(*詩) 臼井喜之介 二五

日本海(*詩) 小野十三郎 二六―二七

河上博士の「日本尊農論」について(下)―思想的に観た河上肇博士(3)―(*評論) 住谷 悦治 二八―三一

跛、山へ登る(*詩) 田木 繁 三二―三三

花東―戦ひのなかに斃れたる今野大刀に―(*詩) 壺井 繁治 三四―三五

電車の詩(*詩) 岡本 潤 三五

作品月評―永井荷風『問はずがたり』(堤重久) 三六―三七

馬のなげき(*詩) 北川 冬彦 三八―四〇

書評 黄炎塔著/水谷啓二・小椋広勝共訳『延安報告』(栗栖継)、トーマス・マン著/高橋義孝・佐藤晃一訳『自由の問題』(堤重久)― 近藤 春雄 四二―四四

中国の水(*随筆) 瀬川健一郎 四五―六三

寒木(*小説) 貴司 山治 六四―七九

浅間の別れ(*小説) 貴司 山治 六四―七九

あとがき 貴司生 八〇

広告 *注4 (八二)

広告 *注5 裏表紙

注 弘文社―藤沢桓夫『花言葉』、藤沢桓夫『横顔』

*注1 弘文社―藤沢桓夫『花言葉』、藤沢桓夫『横顔』

*注2 ジイド、トルストイ、シューベルト、チエホフ、ダ・ヴィンチ、シレル、エンゲルス、レーニン、エンゲルス

*注3 湯川弘文社―児童図書、宇野浩二『童話集龍介の天上』、小川未明『童話集 銀河の下の町』、新児童文学集団『童話集 天狗の別荘』、新児童文学集団『童話集 動物列車』、栗栖継『童話集熊と線路番』、実野恒久『科学物語 僕等の知恵袋』

*注4 弘文社―村松梢風『残菊物語』、貴司山治『洋学年代記』

*注5 弘文社―美術雑誌『ぱれつと』

第一卷第六号 昭和二十一年十一月号 十一月二十日発行

新描写論(*評論) 徳永 直 二一―六

われらのロマンティズム（*評論） 八田 元夫 七一〇
マルクス主義以前の「社会主義論」—思想的に観た河上肇博士—（*評論）

動じないもの（*評論） 住谷 悦治 一一一—一五
小田切秀雄 一六一—一九

TOZAI（*通信） 二〇—二一

—死せるウエルズ、シヨウ益々健在、アメリカから帰つたエレンブル
グ、プロコフイエフの歌劇『戦争と平和』—

日記（*随筆） 和田 傳 二二—二四

浅間つれづれ（*随筆） 沖野岩三郎 二四—二五

種蒔きから稲つきまで—万葉集の人生 四—（*評論）

武田 祐吉 二六一—三一

作品月評 平田次三郎 三三—三五、三七

—坂口安吾『外套と青空』、豊島与志雄『波多野郎』、大日向葵『マツ

コイ病院』—

書評—徳田秋声「縮図」（平田次三郎） 三六一—三七

わがまま随筆—誕生日— 藤森 成吉 三八—四二

野草食譚（*随筆） 江原 鈞 四三—四六

小説「蜃気楼」について（*評論）ピリペンコ（栗栖継沢） 四七—四九

蜃気楼（*小説） コツユビンスキイ（栗栖継沢） 五〇—六三

草の塚（*小説） 加賀 耿二 六四—八〇

あとがき 貴司生 八一

広告 *注2 裏表紙

注

*注1 弘文社—藤森成吉『何が彼女をさうさせたか』、間宮茂輔『鯨』、貴

司山治『洋学年代記』、武田祐吉『万葉自然』

*注2 弘文社—美術雑誌「ぱれつと」

第二巻第一号 昭和二十二年特集号 四月三十日発行

人間追及の道—文学の課題と方法—（*評論） 小田切秀雄 二—一五

ソヴェート文学の十年（*評論） 岡沢 秀虎 一六—二四

中国文壇と留日学生（*評論） 近藤 春雄 二五—三〇

志賀直哉氏とフランス語（*評論） 伊吹 武彦 三一—三三

魯迅の小説（*評論） 小田 嶽夫 三四—四五

日本の秋（*俳句・十句） 藤森 成吉 四五

句帳（*俳句・百五十六句） 千家 元麿 四六—五〇

トーマス・マン論（*評論） *注1 平田次三郎 五一—五七

隻脚悲唱（*短歌・十首） 平光 善久 五七

人生のための文学（*評論） *注2 本多 顕彰 五八—六三

作品月評 平田次三郎 六四—六五

—宮本百合子『風知草』、小沢清『街工場』、荒木巍『草の中』、伊藤佐

喜雄『危機』— 藤本 成吉 六六—七〇

わがまま随筆—短い人生— 咲村 皎二 七〇

或る悼詩（*詩） 名告藻を食ふ話—万葉集の人生 五—（*評論）

野草食譚（*随筆） 武田 祐吉 七一—七五

海外文化の動き（*通信） 江原 鈞 七六—七九

—「イタリー」超現実主義の父、キーリコの近情、「フランス」印象派

画家ピエール・ボナールの回顧展と近情、「ソビエト」芸術粛清の槍玉

に上つた小説と映画、「イギリス」シヨウ翁 プリン市の公民権を授与

八〇—八五

九二

さる、「アメリカ」リストの直弟子ローゼンタール死す、病める劇作家
ユージン・オニールの劇界復帰―

書評^{*注3}

平田次三郎 八六一―八九

―フオイヒトワンガー著／道本清一郎訳『ソビエト紀行』、清水基吉

『雁立』―

蜃気楼（*小説） コツユビンスキイ（栗栖継訳） 九〇―九九

曇り硝子（*詩） 杉浦 伊作 九九

あとがき^{*注4} 貴司生 一〇〇

注

*注1 摺筆―九・二〇

*注2 摺筆―九月二十日

*注3 摺筆―九・三〇

*注4 「◇去年の十一月号を出したあと、出版危機の波に用紙をさらわ

れて「東西」もけふまで休刊を余儀なくされたが、やつとこの「特集号」を出すことができた。これからの雑誌はすべて六十四頁以下に制限されてしまふらしいので、百頁のこの特集号は二度と出せないかもしれない。したがってこの一冊は堂々たる偉容だといふことになる。」◇出版界の整理が行はれ、用紙の公定価格配給が復活するかぎり「東西」は制限頁数内でつゞけて発行してゆくことに変りはない。前発行所の弘文社からはなれ、今後は私の全責任で新たに東西社を設立した。東西は東京と京都とに事務所をおき、両方で雑誌「東西」の外、文学図書の出版をもやつて行く。大阪の弘文社主湯川松次郎氏と私との間は従来どおりのよしみにつながり、素人の私をいろいろ援助してくれることにもなつてゐる。」◇私は、プロレタリア文学運動が反動の波に崩れおちたあと昭和十年から十三年迄「文学案内」といふ雑誌を出してゐたがそのことで当局から一年間不法檻禁をくひ、「文学案内」はその間につぶれてしまつた。今それを復活せよ、と私にすゝめてくれる知友が何人もあるが、「東西」はその復活のつもりである。しかし世の中がもう少ししたてなほれば「文学案内」そのものの復活も考へてみたいと思つてゐる。」

【し】
 志賀義雄 1(4)-4
 式場隆三郎 1(1)-60
 清水光 1(4)-23
 新村出 1(1)-46、1(4)-48、1(5)-21
 新村猛 1(4)-39

【す】
 須井一(→加賀歌二)
 杉浦伊作 2(1)-99
 杉森孝次郎 1(3)-38
 鈴木安蔵 1(1)-61
 住谷悦治 1(1)-56、1(2)-4、1(3)-8、
 1(5)-28、1(6)-11

【せ】
 瀬川健一郎 1(5)-45
 千家元麿 1(1)-4、1(2)-40、1(3)-26、
 1(4)-71、2(1)-46

【た】
 田木繁 1(1)-60、1(2)-41、1(5)-32
 武田祐吉 1(1)-43、1(2)-35・56、1(4)-88、
 1(6)-26、2(1)-71
 太宰治 1(2)-23
 谷口善太郎(→加賀歌二)
 谷村博武 1(3)-29

【つ】
 堤重久 1(4)-94・96・98～101、1(5)-36・40
 壺井繁治 1(5)-34

【と】
 土岐善麿 1(2)-34
 徳永直 1(4)-12、1(6)-2
 豊田三郎 1(3)-37

【な】
 長沖一 1(3)-46
 中野重治 1(2)-26

【に】
 新居格 1(1)-27、1(2)-53
 新島繁 1(1)-57、1(4)-29

【の】
 野淵昶 1(1)-54

【は】
 八田元夫 1(1)-40、1(2)-36、1(6)-7

【ひ】
 土方与志 1(1)-57
 平田次三郎 1(6)-32・36、2(1)-51・64・86
 平光善久 2(1)-57
 ピリペンコ 1(6)-47

【ふ】
 藤沢恒夫 1(1)-13
 藤森成吉 1(1)-7・39・51、1(2)-19・60、
 1(3)-12・43、1(4)-43・68、
 1(5)-20、1(6)-38、2(1)-45・66
 舟木重信 1(5)-3

【ほ】
 ホロヴゴ、アンドリー 1(4)-143
 本多顕彰 2(1)-58

【ま】
 牧野弘之 1(3)-41
 槇村浩 1(3)-24
 松岡譲 1(3)-17
 松本正雄 1(5)-10
 間宮茂輔 1(1)-25、1(2)-11

【み】
 三好十郎 1(3)-37

【む】
 村山知義 1(4)-15

【や】
 八木隆一郎 1(3)-38
 山本修二 1(1)-54

【ゆ】
 結城健三 1(3)-40

【よ】
 吉井勇 1(1)-55、1(2)-34、1(4)-44
 米川正夫 1(1)-60

【わ】
 和田伝 1(4)-116、1(6)-22
 渡辺順三 1(3)-39

『東西』執筆者索引

凡 例

この索引は、細目中のすべての執筆者（但し、格言などの引用文の著者を除く）の人名を下記の要領で五十音順に配列した。

1. 外国人名は苗字（姓）を基準とした。
2. 旧漢字、異字体は、それぞれ新漢字、正字に改めた。
3. 筆名は、外国人作家も含め、わかる限り慣用されている名前に統一した。
4. 表記は、巻数（号数）- 頁数の順とし、翻訳はイタリックとした。

- | | | | |
|-------|---|------------|---|
| | 【あ】 | | 【か】 |
| 秋沢修二 | 1(3)-37 | 加賀耿二 | 1(1)-69・86、1(2)-63、1(3)-65、
1(4)-102、1(6)-64 |
| 浅原六朗 | 1(3)-21 | 河竹繁俊 | 1(3)-38 |
| 阿部知二 | 1(2)-49 | 川田順 | 1(1)-56・57 |
| | 【い】 | 樺俊雄 | 1(3)-38 |
| 石川達三 | 1(4)-6 | 上林暁 | 1(2)-50、1(4)-50 |
| 石濱純太郎 | 1(1)-57、1(3)-4、1(5)-15 | | |
| 絲屋寿雄 | 1(1)-55 | 【き】 | |
| 伊吹武彦 | 1(1)-59、2(1)-31 | 貴司山治 | 1(1)-75・96、1(2)-20・27・72・
80、1(3)-55・80、1(4)-94・97・
100・160、1(5)-64・80、1(6)-81、
2(1)-100 |
| 岩倉政治 | 1(3)-13、1(4)-130 | 北川冬彦 | 1(1)-62、1(2)-41、1(4)-58、1(5)-38 |
| | 【う】 | 木村毅 | 1(3)-38 |
| 臼井喜之介 | 1(5)-25 | | |
| | 【え】 | 【く】 | |
| 江原鈞 | 1(2)-46、1(3)-35、1(4)-92、
1(6)-43、2(1)-76 | 栗栖継 | 1(4)-33・98・143、1(5)-38、1(6)-
47・50、2(1)-90 |
| 穎原退蔵 | 1(1)-58 | | |
| 江森盛弥 | 1(3)-37、1(4)-10 | 【こ】 | |
| | 【お】 | 小泉琴三 | 1(1)-29 |
| 小穴隆一 | 1(1)-59 | コチュビンスキー | 1(6)-50、2(1)-90 |
| 大久保恒次 | 1(1)-48、1(2)-44 | 小西英夫 | 1(3)-39 |
| 岡沢秀虎 | 1(1)-58、2(1)-16 | 近藤春雄 | 1(5)-42、2(1)-25 |
| 岡田播陽 | 1(2)-43 | | |
| 岡麓 | 1(3)-37 | 【さ】 | |
| 岡本潤 | 1(1)-57、1(5)-35 | 斎藤栄治 | 1(1)-64 |
| 小川未明 | 1(3)-37 | 斎藤茂吉 | 1(1)-56 |
| 沖野岩三郎 | 1(1)-31、1(3)-15、1(6)-24 | 三枝博音 | 1(1)-34、1(2)-30 |
| 小田切秀雄 | 1(6)-16、2(1)-2 | 咲村皎二 | 2(1)-70 |
| 小田嶽夫 | 1(2)-52、2(1)-34 | 佐佐木信綱 | 1(1)-54 |
| 小野十三郎 | 1(1)-58、1(2)-42、1(3)-32、1(5)-26 | 佐多稲子 | 1(4)-54 |

